

両腕を解放された亜弥香は、一瞬戸惑ったように視線を泳がせたが、すぐに大きな自分の乳房を義理の弟のために左右から寄せ合わせてくれた。

恥ずかしさのためか、亜弥香も胸の谷間を肉棒で擦られて興奮しているのか、頬を上気させ、かすかに開いた唇から熱い吐息を繰り返している。

「こうやって擦られると義姉さんもやっぱり気持ちよかつたりするのかな？」

義姉の返事を待たずに史郎は寄せ合わされたふたつのやわらかなふくらのあいだに肉棒を差しこんだ。

汗と唾液でぬるりとすべる。

義理の姉であると同時に憧れのグラビアアイドルの亜弥香の胸の谷間に肉棒を挟みこんでいる……。

その遊びを噛みしめながら、史郎は乳房の谷間を肉棒で前後に擦りはじめた。

「はあああ……」

まるで肉穴を穿たれたときのように亜弥香が悩ましく喘いで見せた。

ぬるぬると擦れるその感覚はたまらない。しかも、義理の弟の肉棒を締めつけるために、亜弥香が左右から一生懸命乳房を寄せ合わせているということが、実際に肉棒に受ける以上の快感を史郎に与えるのだった。

「義姉さんのオッパイ、気持ちいいよ。ただ見た目がいやらしいだけじゃなくて、こんなに気持ちいいなんて……」

「ああ……いやよ、そんなこと言わないでえ……」

すっかり火照^{ほて}った顔を恥ずかしげに歪める亜弥香。そのGカップの胸の谷間を肉棒がぬるぬると擦っている。

巨大な乳房に完全に肉棒が埋もれてしまい、腰を突きあげたときに先端がかすかに顔をのぞかせる程度だ。

亜弥香の顔の横あたりに手をつき、覆いかぶさるようにして史郎はズンズンと腰を突きあげつづけた。

快感の高まりにつれて、徐々に腰の動きが激しくなっていく。

「はああ……。はああん……。史郎君……」

史郎が激しく腰を振りつづけると、ますます呼吸を苦しそうなものに変え、亜弥香はときおり悩ましい声を絞りだした。

胸の谷間を肉棒で擦られたところで気持ちいいわけではないはずだ。亜弥香はきつと、自分のしている恥ずかしい行為に興奮しているのだろう。

乱暴に擦られた乳房が赤くなり、そのあいだを行ったり来たりしている史郎の肉棒

も真っ赤に充血し、パンパンに腫れあがっている。

充満した思いが破裂するのは近い。

「義姉さん、ぼく、もう……」

史郎が苦しげに言いながら腰の動きをさらに速めていくと、亜弥香も悩ましく鼻奥を鳴らしながら左右からぎゅうっと乳房を押しつけ、史郎の肉棒を締めつけてくる。

「ああ、史郎君……」

亜弥香の切なそうな声を聞き、むずむずとした感覚が史郎の体の奥のほうからわきあがってくる。

「ああ、も、もうだめだ。で、出るよ、義姉さん……。ううッ……」

ずんとひととき強く腰を突きあげて、史郎は体の動きをとめた。

やわらかな乳房のあいだから先端をのぞかせた肉棒が、ピクリと震え、次の瞬間、生臭い白濁体液が勢いよくほとばしりてた。

「はあああッ……」

史郎の灼熱の体液は、亜弥香の顔の上に飛び散った。ビクンビクンと、断続的に射精を繰り返す、そのたびに可愛らしい顔を白く汚していく。

自分でも驚くほど大量の精液が亜弥香の顔を汚した。



最後に管のなかに残ったぶんを亜弥香に音をたてて吸いだすように命じると、史郎は顔に出したスperlマを亀頭ですくい、乳房の上に塗りつけひろげた。

「義姉さんのパイズリ、最高だったよ」

放心したように横たわっている亜弥香を見おろすと、乳房から顔にかけて、自分の汚い体液にまみれてしまっている。

おまけに床の上はもう乾きはじめていたが、小便まみれなのだ。

その様子を見ていると、男たちの注目を浴びるグラビアアイドルを完全に汚してやったという気がして、史郎は大きな征服感に包まれ、その感覚に酔いしれるのだった。